

なぜ天を見つめて立っているのか

主任司祭 昌川信雄

人類の真の不幸、それはこの世に生れ落ちた命が『死の壁』でふさがれた出口の前で、救いなく死んで終わるということではないでしょうか。イエスは、その人類に、壁をくぐり抜ける道を示すために来られた『レスキュー隊』でした。人類はこのレスキュー隊の後に従って『死の壁』を脱出したとき、『永遠の命』の世界に招かれるのです。

脱出のためのイエスの指示は、他ではなく、「エルサレムを離れず…父の約束された聖霊を待ちなさい」でした。『エルサレム』とは、イエスの受難死の場、人がこの世で最も厭う『苦しみ』を意味します。「この苦しみを逃げないで、ここに留まって聖霊を待て」とイエスは指示されたのです。苦しみを厭うのは私たちの肉の体、自我です。ですから「自我の服を脱いで聖霊の服に着替えよ」との指示です。イエスはこの指示をご自身、『十字架の死』によって、エルサレムで克服(復活)され、私たちに後に続くように『要請』しておられます。

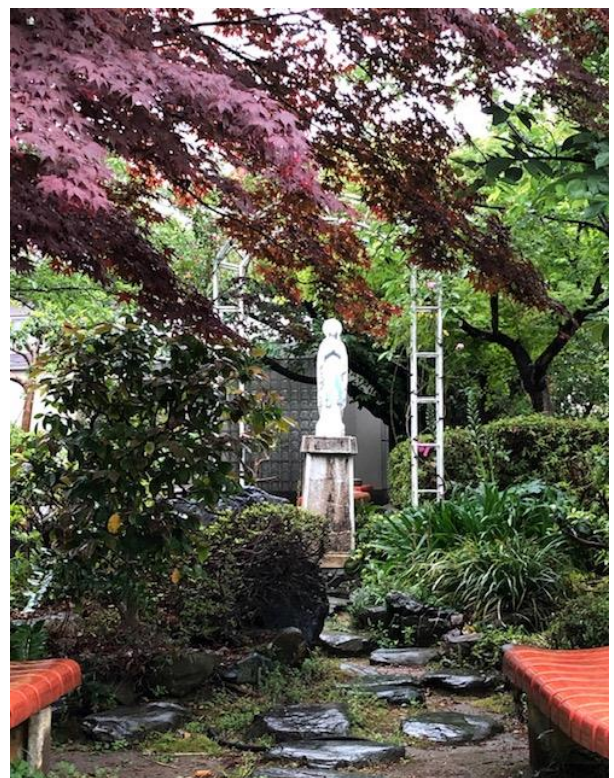
十字架とは、拘束された体を捨て、自由である心で神に向かう道です。これまであなたが生きて来た自我による生き方に死んで、聖霊による変容した命で生まれ変わって生きる道です。

「自分の命を愛する者はそれを失い、
この世で自分の命を憎むものはそれを
保って永遠の命に至る。(ヨハネ 12 章 25 節)」
のです。

こうして復活されたイエスが弟子たちを遺して天に昇って行かれたのは、イエスが天に昇って行った、その同じ道を通して、私たちが命の親である天の父のもとに戻れるよう援護者聖霊を私たちに届けるためでした。

この世のどんな災い、苦しみも『イエスの要請』を心に留めて、母マリア様に、「今も死を迎えるときもお祈りください」と取次ぎを願っているなら、何ものも恐れることはないのです。

2010年5月24日



雨上がりの教会の庭